【香川ファイブアローズ賞】

『弱者と決めつけないで』

三豊市立三野津中学校　三年　上村藍子

『弱者と決めつけないで』これは、私が小学６年生の時、県の文化祭で見た当時の中学生が描いた人権ポスターのキャッチコピーだ。それは私の心に強く残り、日記にその時の思いを書いたこと、日記を書きながら心がザワザワし、色々なことを感じたことを今でも鮮明に覚えている。

当時の日記を読み返してみると、「自分が描いた人権ポスターよりも、中学生のポスターの方がキャッチコピーの種類も多くて、生活のなかにありそうなことが多かったです。特に印象に残っているのは『弱者と決めつけないで』というキャッチコピーです。作者は、どんなことを感じてこのキャッチコピーをつけたのかな。無意識に決めつけてしまっていることがあるかもしれないし、自分はいいことをしていると思ってしていても、してもらっている人（相手）にとってはそうではないこともあるかもしれない。だから、相手の気持ちを自分で勝手に思い込まずに、しっかりコミュニケーションをとることが大事だと思いました。」と書いてあった。

あの時心に残ったキャッチコピーをもとに、改めて「社会的弱者」を検索してみると、「社会集団の成員でありながら、大多数の他者との比較において、著しく不利な、あるいは不利益な境遇に立たされる者（個人あるいは集団）のことである。」とあった。つまり、社会的弱者は「大多数の他者との比較」から生み出されるものであり、その人個人をとらえ、その人らしさを尊重し、他者と比較せずに理解しようとする視点に立てば、「社会的弱者」ではなくなるのではないだろうか。

福祉の仕事をしている母は、福祉体験の出前講座に行くことがある。

その中で、車いす体験や高齢者疑似体験、認知症サポーター養成講座などもしているそうだ。車いすを使う人や高齢者、障害者は不自由で弱者だから助けてあげないといけない、ということを伝えているのではなく、実際に体験することで、環境や周囲の認識が障害をつくることもあることを知ってもらうことも大事な目的のひとつだと聞いた。車いすを使っていても、バリアフリーな環境であれば「できない」と感じる場面はない。しかし、段差がある場所では、構造上、「できない」ことが生じてしまう。障害があっても、認知症になっても、自分で考え、できることはたくさんある。年をとることや障害があることが「不自由でかわいそう。」「自分達と違っていて気の毒。」なことではなく「弱者」でも「かわいそう」でもないのだ。高齢者であっても、障害者であっても、認知症を患っている人であっても、地域の誰であっても、誰かが困っている時には声をかけ、必要とされ自分にできることがあればする、ということが「あたりまえ」になればいいと思う。一人ひとりがお互いを尊重し、周囲や地域の理解があれば、誰にとっても住みやすい社会になるのではないだろうか。

私は、「普通」と言われることに違和感を感じることがある。まわりで「普通」とされていることが、私にとっては「普通」でないことも多いからだ。例えば、クラスの女子は大半が髪が長いが、スポーツをしていて、面倒くさがりな私は、ショートカットにしている。時々、「女の子だから、もう少し髪を伸ばしたらいいのに。」とか、「中学生の女の子って、普通、髪伸ばしたがるんじゃない？」と言われることがある。また、私は私服でほとんどスカートを履かないせいか、「あまり女の子っぽい格好しないね。」と言われることがある。一方で、「短い髪型、好きなんだね。似合ってるよ。」「動きやすそうだね。」と言われると、自分を否定されず、認めてもらえたような気がする。それは、私の選択、私の価値観、ひいては私自身をみてくれているからなのだ

と思う。

中学生になり、交友関係も広がったが、自分と価値観の似た人達と過ごしていることが多いように思う。自分のことをよく分かってくれている人達のなかでいることは心地よい。しかしそれは、自分と価値観の違う人とは距離をおいていることにもなるのかもしれない。実際に、自分とは異なる考えを持っていそうな人と、あえて関係を築くことや、コミュニケーションをとることを避けている面もある。

これから高校、大学、社会人となるにつれ、今よりもきっとさらに多くの人と接することになるだろう。そしてそれは、様々な立場、価値観、考え方の人と出会うことにもなるだろう。そんな時、自分と異なるところがあるかどうかを探すのではなく、自分の価値観を相手に押し付けず、その人自身を知ろうとし、その人の個性を尊重できる人でありたい。そしてまた、私自身のことも理解してもらえるよう、しっかりコミュニケーションをとれる人になりたい。

これから先も、私の中にはずっと、『弱者と決めつけないで』のキャッチコピーが生き続けるだろう。